

正典化における旧約聖書の排除とアンチ・セミティズム
— 古代教会周縁の反ユダヤ人問題を巡って —

津 田 謙 治

『国際関係・比較文化研究』第8巻第2号(2010年3月)抜刷

【論文】

正典化における旧約聖書の排除とアンチ・セミティズム

— 古代教会周縁の反ユダヤ人問題を巡って —

津田 謙 治

1. 問題設定

新約聖書が現在のように27の文書に正典化されていない二世紀において、キリスト教的思想家マルキオン（C.E.85-165頃）は旧約聖書を救済の書物から除去し、新約と旧約の連関を断ち切ろうとした。彼は二つの書物を分断しただけでなく、そこに啓示された神さえも二神に切り離した。ローマの公同教会はこの動きに対して明確に抗議し、予型論と寓意論とを駆使して両者の繋がりを強調した。旧約の預言者が告げ知らせた救い主とはイエス・キリストのことであって、何よりも旧約の神と新約の神は同一であり、救いの業はイスラエルの時代から絶え間なく持続していると公同教会は主張したのである。

マルキオンの行った旧約聖書の排除は、近代の研究者によって反ユダヤ主義的傾向の表象と捉えられ、場合によってはマルキオン研究の代表的存在であるドイツの神学者ハルナックと近代ドイツのアンチ・セミティズムと結び付けられて考察された。二十世紀初頭にハルナックが著書『マルキオン¹』（初版1921年、改訂版1924年）において描き出したマルキオン像は、約一世紀を経過した現代でも強大な影響力を保ち続け、そこに表現された反ユダヤ的傾向がハルナックの思考と不可分とも理解され得る。言うまでもなく、これが明示的か否かに拘わらず、ここから第二次世界大戦中のドイツにおける反ユダヤ主義との関連性が示唆された²。

しかし、このような理解には幾つもの疑問が呈される。そもそも、旧約聖書の排除をもって、反ユダヤ主義的と断言できるのであろうか。ハルナック自身は、仮に彼の書簡からアンチ・セミティズム的要素を見出すことがあり得たとしても、どのようにそれを理解し、マルキオンという人物の中に投射したと言えるのか。何よりも、マルキオンは自らの宗教的基盤の確立に反ユダヤ主義的要素を内包していたのであろうか。それは彼を論駁しようとするローマの教会側の意図とは言えないであろうか。

本稿では、上記のような問題に意識を向けながら、マルキオンの旧約聖書排除を分析し、それが反ユダヤ主義問題とどのような関連性を包含しているのか、またこの問

題が彼の教義的な基盤の形成にどのような関係を持ち得るかを考察する。

2.1. 「マルキオンと二神論」

マルキオンは85年頃に黒海沿岸に近い地域のポントス地方に生まれ、138年近辺にローマにやって来て公同教会に受け容れられた。しかし、彼の思想に難儀を示した教会は、144年頃に彼を破門し、彼は独自のマルキオン派教会³を設立、展開したとされている⁴。

この人物が教会から破門される要因となったのは、彼の二神論的な思考による。マルキオンが活躍した時代より半世紀ほど後に、アフリカのテルトゥリアヌス（160頃-220頃）という人物は彼について次のように述べている⁵。

「マルキオンが二つの異なった神々を仕立て上げたことを我々（ローマ教会）は確信している。即ち、一方は裁く者 (iudicem) であり、凶暴 (ferum) で、戦闘能力がある (bellipotentem)。他方は温和 (mitem) で寛大 (placidum) であり、あらゆる在り方において善 (bonum) で、最も善き者 (optimum) である。」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』1,6,1.)

テルトゥリアヌスによれば、マルキオンは最後の審判にて罪人を裁く「義の神」と、人間を一切裁くことなく救済する「善の神」との二神を説いたとされる。前者はユダヤ教の説く世界の創造神であって、律法と預言者を通じてイスラエルの民にメシアを遣わす神である。後者はキリストが宣べ伝えた神であり、マルキオンはこの事実気付いていたのが使徒パウロのみであると主張し、彼の言説（パウロ書簡）に従って、キリストの神のみを信仰の対象とした。

2.2. 「マルキオンの旧約と新約の分離」

ユダヤ教の神とキリスト教の神との分離と、旧約聖書と新約聖書の分離はマルキオンにとって密接な繋がりのあるものであった。新旧約聖書が指し示す神がそれぞれ異なるのであれば、二つの書物の位置付けや読み方そのものが大きく転換する。

「律法と福音の分離は、マルキオンの独自の、かつ主要な所業である。・・・この（マルキオンの書物である『マルキオンの反対命題』）は、律法と福音の不一致 (discordiam euangelii cum lege) を引き起こす試みである。それはその（律法と福音という）両文書の内容の違いから、マルキオンの弟子たちが（二人の）神の相違を論じるためのものであった。」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』

1,19,4.)

マルキオンと彼の弟子たちは、旧約（ここでは律法）と新約（ここでは福音）が語る内容は一致せず、むしろ対立するものと捉えていた。マルキオンは復讐法などを挙げて、「目には目を⁶」を説く旧約の神と、「右の頬を打たれたら左の頬を向ける⁷」ことを説くキリストの神とが対立する立場にあると理解しようとしている⁸。もちろん、初期のキリスト教の教父たちが行ったように、旧約の預言者たちが伝えた救済者とはイエス・キリストであって（予型論的解釈）、旧約と新約との矛盾は人間の理解力に原因があるのだから、神の助けによって解釈する（霊的解釈、もしくは寓意論的解釈）道も開かれていた⁹。しかしマルキオンは、寓意的な解釈を排し、字義的な解釈（書かれている文字通りの意味）を採って二つの書物の矛盾を対立として捉えた¹⁰のである。

2.3. 「マルキオンの旧約聖書の排除」

マルキオンはキリストの神を伝える一つの福音書（『ルカによる福音書』）と十のパウロ書簡¹¹から、独自の正典（「マルキオン聖書」もしくは「マルキオン・カノン」）を編纂した。この正典には旧約聖書は含まれていない。彼にとって旧約の創造神は救済神と異なるので、救済に関わる書物に含まれないことは自然にも見える。

ローマの公同教会は、この旧約の「排除」に異議を唱えて、旧約と新約の繋がりを強調した。二世紀においても旧約の書物としての権威は揺るぎないものであって、多くの教父たちが議論の際に旧約に依拠していた¹²。事実、これを基盤として四世紀には新旧約を含めた現在の形の聖書が定められる¹³。

しかし、ローマ教会にとっては「排除」であった旧約の（正典への）非選択も、マルキオン自身にとって同様の意味を持っていたかは疑問が残る。マルキオン自身は旧約聖書を歴史書として認めていたのであって¹⁴、創成神話からメシアの到来まで全てが事実として起き、また起こるであろうと理解していた。創造神がユダヤ人をエジプトから連れ出して律法を授け、彼らにメシアという救いの手を差し伸べるという旧約的世界観をマルキオンは認めているのである¹⁵。このメシアはイエス・キリストではない。キリストは創造神とは別の神に由来し、旧約の神から十字架上の血と死によって信仰者を贖うのである¹⁶。ここでは正典の対象から外れてはいても、旧約は内容を否定されないどころか、マルキオン自身の掲げる救済神話の部分的な根拠ともなっている。

2.4. 「マルキオンと反ユダヤ主義」

公同教会がマルキオンに対して非難した旧約聖書の「排除」は、そのまま「反ユダヤ主義」と理解される余地があった。ユダヤ人の正典を救済の書物から除外したからである。しかし、この問題もまた複雑であった。ユダヤ人に対する思想的攻撃を「反ユダヤ主義」と見なすのであれば、それは公同教会の側にも見出されるし、キリスト教が誕生する前からしばしば起こっていた。事実、マルキオンを反駁したテルトゥリアヌス自身が、『ユダヤ人反駁』という書物を残している。また先の節で述べたように、マルキオンは救済の根拠としての正典から旧約を排除したが、その歴史的事実の価値を認め、ユダヤ思想的な世界観を全て否定した訳ではない。加えて、彼は創造神を崇拜する立場に対する侮蔑を抱いてはいても、ユダヤ人自体に対する非難や差別を展開してはいない。「反ユダヤ主義」という言葉に内包されるものに関しても、考察の余地はあるであろう。

3.1. 「ハルナックと『マルキオン』」

以上のようなマルキオンの教説の復元は、その多くをA.v. ハルナック（1851-1930）の研究書『マルキオン』に負っている。マルキオン自身の著作は現存しておらず、彼の敵対者（エイレナイオス、テルトゥリアヌス、エピファニオスなど）による論駁書のみがマルキオン研究の一次資料となるために、これには複雑な問題が内包されていた。

ハルナックは若干19歳（1870年）でマルキオンに関する論文¹⁷によってドルパト賞を獲得した後、研究者人生の殆ど全てとも言える50年以上を費やして『マルキオン（副題：異邦の神の福音）』を書き上げた。本書は現存するマルキオンについて書かれた古代の資料を全てと言って良い程網羅し、緻密な分析と明晰な議論によって揺るがし難いマルキオン像を作り上げている。「パウロ主義者」、「ルター、アウグスティヌス以前の最初の教会改革者」など、半ば理想化されたこの像は、公刊後にすぐさま様々な方面から非難を浴びた¹⁸。感情的な批判を除けば、ハルナックがマルキオンに当てはめた「反哲学者」や「非グノーシス主義者」という像に関しては、これをそのまま受け容れることは最早困難であろう。しかし、この書は公刊後一世紀近く経つ現在においても強い影響力を持ち続け、「ハルナック以後」の研究視点を模索することも課題となっている¹⁹。

3.2. 「ハルナックと19世紀後半～20世紀前半のドイツ」

ハルナック自身はリッチェル学派に属し、19世紀以来ドイツで発展した自由主義神学の立場に立脚しているものとして理解される。彼は近代科学の思考と成果を神学研究に積極的に取り入れて、教会史を歴史的かつ批判的に分析した²⁰。もちろん、彼のマルキオン研究もこのような姿勢で進められた。彼の議論は資料の批判的研究によって構築されたものであったが、特にマルキオンの旧約排除は、部分的に同様の立場を受容する、当時ドイツにあったルター派福音教会の立場と結び付けられて理解された²¹。ドイツのルター派教会は現世肯定的な側面があり、部分的にビスマルクの進めた「小ドイツ」主義的立場と密接な関係を持っていた²²。ハルナックと教会勢力との関係は一枚岩ではなく、彼は教会保守勢力からの反対によってベルリン大学神学部就任を阻まれたが、宰相ビスマルクの強力な後押しによって最終的には教授職に就くことが出来た²³。

他方で、ベルリン大学では「歴史学の父」ランケの後任となったトライチュケが「ユダヤ人はわれわれの災い」という言葉と共に、反ユダヤ主義とナショナリズムを煽動していた。ハルナックとトライチュケは確かにビスマルクを介して繋がりがあのように見えるが²⁴、実際にはトライチュケが煽動した「ベルリン・反セミティズム論争」(1879/1880)においてユダヤ人側に立ったテオドール・モムゼン²⁵と共にハルナックは研究と学際的な活動を共にしていた²⁶。ハルナックの属するドイツ・ルター派教会と反ユダヤ主義の相関関係については、慎重に考察する必要があるであろう。

3.3 「ハルナックのマルキオン解釈」

ハルナックの置かれた環境がドイツのナショナリズムに近い位置にあったことは恐らく確かであろう。また、旧約の排除を巡って、ハルナックがマルキオンに自分の思想を重ねていたことも部分的には想定され得る²⁷。しかし、彼がこの二世紀の思想家をある種の熱狂的なバイアスで解釈したとしても、マルキオンの旧約排除と反ユダヤ主義的側面というのはハルナックの創作ではない。むしろ、古典資料を通じてそれらを認識したことが、ハルナックがマルキオンに関心を持った理由の一つであると推測するべきであろう。実際に、我々がエイレナイオスやテルトゥリアヌスなど二世紀の資料を直接読んだとしても、ハルナックの解釈と著しい相違がある訳でもない。ハルナックにおける反ユダヤ主義の問題は、彼がマルキオン主義とも呼べるものに傾倒して、旧約聖書を排除する立場に賛同したという点に恐らくあると言える。だが、彼がマルキオンを通じて考察していたように、旧約聖書の正典からの排除が単に反ユダヤ主義を志向しているものとは捉えにくいということは等閑視すべきではないであろう。

4.1. 「アンチ・セミティズムとアンチ・ユダイズム」

マルキオンにおける更なる反ユダヤ的要素の分析を始める前に、若干用語的な部分に触れておく必要があるであろう。アンチ・セミティズムとは、「セム族」という概念から明白なように、民族及び人種的なものに向けられた対立（反・アンチ）的思考と理解し、他方でアンチ・ユダイズムとは「ユダヤ人」という宗教を基盤にした類型に属する人々、つまりユダヤ教に向けられた対立感情と理解することも可能かも知れない。また、アンチ・ユダイズムを包括的（上位）概念と捉えて、その中に（下位概念として）包含される対民族的感情をアンチ・セミティズムと捉えることも有り得るであろう。しかし、例えば「日本人」という地域性や人種性を基盤とした概念とは異なって、「ユダヤ人」もしくは「ユダヤ民族」という概念そのものは基本的に「ユダヤ教徒」であるという宗教性を基盤とした類型であり、「民族性」と「宗教性」から両者を峻別することがどれ程可能なことなのかは不明瞭である。もちろん、議論によっては「反セム主義」と「反ユダヤ主義」と分けて考察する必要性が生じる場合も考えられるが、ここでは殆ど同義で用いることが適当であろう²⁸。

4.2. 「反ユダヤ主義の位相」

また、「反ユダヤ主義」という用語が示す内容に関しても、様々な視点が提起されるであろう。この言葉を最も広義で解釈すれば、歴史上において起こった全てのユダヤ人に対する憎悪や敵意、差別や迫害を指すと言える。狭義でこの用語を捉えようとするならば、宗教的立場というよりも社会的な問題であって、近代社会に根差したイデオロギーとしての組織化された主義・主張とも解される²⁹。しかしこれに関しても、前二、三世紀にシリアのセレウコス朝で起こった³⁰国家的政策としてのユダヤ人迫害³¹との共通性が見出されるため、単に歴史的な限定、宗教性、社会性、民族性という視点で細かく限定していくことは非常に困難である。ここで、この問題に深入りすることは避けて、「反ユダヤ主義」と言った場合には広義に解釈し、「ユダヤ人」に向けられた敵対感情をこの言葉で（そして「反ユダヤ主義」的傾向を「反・ユダヤ性」という言葉で）表すこととする。用語の的確性を求めることは必要だが、結局「旧約排除は広義では反ユダヤ主義で、狭義では反ユダヤ主義ではない」と言ったところで、特に学際的な議論には発展しにくいと考えられるからである。

5.1. 「マルキオンにおける反ユダヤ性（旧約排除）」

既にマルキオン思想の中に見られる反ユダヤ的性質については触れておいた。特徴的と見られるのが、旧約的世界観とキリスト教世界との分離、つまり両者を繋ごうと

する予型論と寓意論の拒否である³²。これによってマルキオンは旧約聖書を救いの書物から排除しているのであって、この書物を聖典と見なす民族への嫌悪と捉えられる余地は確かにある。

しかし、既に見たように彼は聖典としてではなくても、歴史的な真実を語るものとしてこの書物に価値を見出している。ゴッペルトはこの点に注目し、マルキオンが寓意論的解釈等を拒否したのは、ユダヤ教の正統的立場（ラビの伝統）やヘレニズム化したユダヤ人に目を向けていたからであると指摘する。彼らが寓意を用いて聖書を解釈することは、旧約の歴史性を歪んだものに変えてしまう。この立場（寓意的解釈）を引き継いだキリスト教の公同教会とは別の解釈をマルキオンは呈示し、その意図はあくまで歴史（的事実）性の強調であって、反ユダヤ主義ではないと彼は捉えている³³。実際、マルキオンは旧約聖書を正典から排除している一方で、旧約聖書の記述と解釈にも非常に精通している³⁴。もちろん、彼は旧約の神と新約の神の分離を説くために二つの書物を熟読したであろう。しかし、それはユダヤ民族に対する感情的な嫌悪や憎悪の結果としての排除と理解するべきではないと考えられる。

5.2. 「マルキオンにおける反ユダヤ性（地上的世界の拒否、アンチ・コスモロジー）」

他方で、マルキオンは地上的世界に対して何らかの批判的態度（アンチ・コスモロジー）を持っている。アンチ・コスモロジーもしくは物質的世界に対する蔑視だけを見るならば、それらは反ユダヤ主義の文脈とは関係のないプラトン主義の中にも見出されるので、必ずしも反ユダヤ的性質とは言えない。マルキオンと同時代のグノーシス思想にも見られるプラトン主義的思考においては、我々を取り巻く感覚的世界は別の世界（叡智的世界）の模倣に過ぎない。霊もしくは心魂の本来の住処である叡智的世界もしくはアイオーンは、地上的世界を超えた完全な世界と見なされる。この二つの世界の対比から、我々の住まうこの世界の不完全性が指摘され、ここからアンチ・コスモロジーに近い立場（但し、ここでの地上的世界そのものに対する蔑視はプラトン自身においては明確とは言えず、ましてや嫌悪とは言えない側面がある。彼自身にとって、地上的世界は極めて良い制作物であって³⁵、アンチ・コスモロジーは叡智的世界との対比の中で捉えるべきであろう）が見出されるのである。

確かにマルキオンには、このような反ユダヤ主義とは別の文脈に位置するプラトン主義的なアンチ・コスモロジーも見出される。しかし、プラトン主義においては、世界の創造者は「およそ原因となるもののうちの最善」の者であり、この「すぐれた善き」者が最善のものとなるように世界を創造している³⁶。他方で、マルキオンの場合はこの地上的世界を造った者を侮蔑し、この製作者に対する「反・創造神（これは基本的にプラトン主義にはない）」の立場が明確である。従って、地上の万物を創造し

た神を崇拜するユダヤ的な進行をマルキオンが拒否している点から、彼の思考に「反・ユダヤ性」を見出すことは可能であろう。

5.3. 「マルキオンとユダヤ人」

しかし、しばしば指摘されるように³⁷、この「反・ユダヤ性」は「反・創造神」であって、「反ユダヤ人」ではないと捉えられる。ユダヤ人はイエスを十字架へと追いやったが、マルキオンはイエス・キリストを殺害したのはユダヤの「神」であって³⁸、ユダヤ「人」にこの責任を向けての議論を行っていない。確かに、マルキオンはユダヤ人が間違った神を崇拜している点を指摘している³⁹。また、彼は創造神に愛されたユダヤ人の優れた人物（義人）が救済されないとも説いていた⁴⁰。しかし、マルキオン派の教会がユダヤ人を迫害した記録も存在せず、「反・創造神」は必ずしも「反・ユダヤ人」であることを要求しない。

また、マルキオンとユダヤ人との共通点も挙げられる。両者は、イエスが預言されたメシアではないということを確認していた⁴¹。そして、預言者と創造神によって約束されたメシアが地上的世界の救済のために遣わされる点についても両者は認めていた。一致しない点は救済を求める神自身についてであるが、マルキオンはユダヤ人がユダヤの神を崇拜することを当然であると考えていた。そこにはユダヤ人に対する信仰の排他性を求めることは逆に、彼の共生もしくは宗教的寛容に類比される傾向を見出すことも可能であろう⁴²。等価ではないとしても、二種類の救済の在り方が認められるのは、少なくとも二世紀のキリスト教世界では極めて珍しいものと言えるであろう。

このようなある種の両義的な「反ユダヤ主義」に関しては、ウィルソンの指摘するように、当時のグノーシス諸派が採っていた態度が示唆的であると言えるであろう。グノーシスは確かにアンチ・セミティズム的要素を内包しているが、その敵意はユダヤ人に対してではなく、義人・聖書・創造神に向けられていた。これはグノーシスの中にはもともとユダヤ人だった者たちがおり、彼らがグノーシスに改宗した後に「ユダヤ的反ユダヤ主義（Jewish-Anti-Judaism）」とも言える立場を形成したからであると捉えられる⁴³。マルキオンにも共通の状況は大いに考えられるであろう。

恐らく両者にとっての「反・ユダヤ性」は、ユダヤ人そのものに向けられたというよりも、（再）ユダヤ化する可能性のあるキリスト教内部に向けられていたのでであろう。ユダヤ的な宗教的教義もしくは実践をキリスト教が引き継ぐことは、ユダヤ教とキリスト教の境界線を危うくするものであった⁴⁴。両者の境界が不明瞭となれば、この時代に最高潮に達していたユダヤ・ナショナリズム（第二次ユダヤ戦争、バル・コクバの乱などが挙げられる）に、キリスト教が吸収される危険もあったであろう⁴⁵。もちろん、この点のみから旧約聖書を正典から排除したと結論づけることは困難であ

る。マルキオンには旧約の神と新約の神が別々であるという揺るぎない確信があり、この確信の根拠を「反・ユダヤ性」のみから見出すことは様々な問題を伴う。しかし、その排除に至った動機の部分的な根拠としての可能性は指摘できると言える。

6. 「結語」

ここまで、マルキオンの旧約聖書排除と反ユダヤ主義との関係を考察した。マルキオンの行為はユダヤ人に対する敵意よりも、むしろユダヤ教とキリスト教という二つの世界観の分離を志向していたように理解される。人間と世界の歴史性の全てをユダヤ的世界観に依存しながら、全く別の救済神話を掲げる彼の思想は御都合主義のようにも見える。しかし、創造からメシアによる救済まで完結しているこの地上的世界からの別離（救済）を望むならば、キリストは全くの異邦の神でなければならなかったのである。この二つの救済の方向性が、マルキオンにおいて旧約と新約の分離として表れたと理解される。

1 Harnack, Adolf v., Marcion: Das Evangelium vom Fremden Gott. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, [1921], 2te Auflage [1924], 1996.

2 特に有名な議論は、ハルナックの死後にマルティン・ブーバーが行ったものが挙げられる。

3 マルキオンと同時代の護教家教父ユスティノスによれば、この教会の勢力は全ての民族に広がったとしている（『第一弁明』26,5 f.）。

4 エイレナイオス『異端反駁』I,27,2-4; テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』I,1,3 f.; エピファニオス『パナリオン』42,1,1-10,4,など。

5 テルトゥリアヌスは三度にわたって『マルキオン反駁』全五巻を書いており、その執筆時期は207年から211年頃が有力視されている。マルキオンが活躍した時代から50年以上も空いているが、質、分量共にマルキオンを伝える最大の資料となっている。しかし、テルトゥリアヌスにはマルキオンの正確な像を表出しようという気は皆無であり、むしろその誤謬を指摘する為に著述しているため、資料の分析には多大な苦勞が伴う。本稿では、シュルス・クレティアンヌ版を用いる。Tertullien, Contre Marcion I-IV, R. Braun(ed.), SC. 365, 368, 456, Paris, 1990, 1991, 1994, 2001; Tertullien, Contre Marcion V, Claudio Moreschini et R. Braun(ed.), SC. 483, Paris, 2004.

6 『レビ記』24:20.

7 『マタイによる福音書』5:39.

- 8 テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』II,18,1.など。
- 9 こうした予型論及び寓意論的解釈は、キリスト教誕生以前にもプラトン哲学との接合を模索したユダヤ教徒、アレクサンドリアのフィロン (B.C.E.25-C.E.45/50) などにも見られるし、マルキオンと同時代のユスティノスなどにも見出される。
cf. 柴田有『教父ユスティノス — キリスト教哲学の源流』、勁草書房、2006年、93-101頁。
- 10 テルトゥリアヌスの記述に基づく (『マルキオン反駁』V,18,10.など)。cf. Aland, Barbara, *Marcion/Marcioniten*, TRE. 22, Berlin, 1991, S.92.; Tyson, Joseph B., *Marcion and Luke-Acts; A Defining Struggle*. South Carolina, 2006, p.33.
- 11 これに含まれるのは、『ガラテヤの信徒への手紙』、『コリントの信徒への手紙一』、『コリントの信徒への手紙二』、『ローマの信徒への手紙』、『テサロニケの信徒への手紙一』、『テサロニケの信徒への手紙二』、『ラオディキアの信徒への手紙 (エフェソの信徒への手紙)』、『コロサイの信徒への手紙』、『フィリピの信徒への手紙』、『フィレモンへの手紙』である。
- 12 これについては様々な例証がある。マルキオンを反駁したテルトゥリアヌス自身もそうであった。cf. 荒井献編『新約聖書正典の成立』、日本基督教団出版局、1988年。
- 13 聖書の正典化の歴史については様々な研究があるが、新約聖書について一般的には四世紀半ばのアタナシオスの文書などで27に限定され、397年のカルタゴ教会会議で正式にそれが認められたとされる。
- 14 マルキオンは旧約聖書の釈義をかなりの分量で行っていたとされる。例えば、『創世記』に関しては、神の天地創造から人間の墮罪まで、全て歴史的事実と捉えて解釈を施していると見られる箇所がテルトゥリアヌスによって伝えられている (『マルキオン反駁』II,24,1; 25,1.など)。
- 15 テルトゥリアヌスは「創造者のキリスト」という言葉を用いている (『マルキオン反駁』III,6,8.) が、本稿では便宜的に「メシア」として、真の神の「キリスト」と区別する。
- 16 このキリストは旧約で伝えられたメシアとは異なっているので、人間にとって「突然 (subito)」やって来たことになる (『マルキオン反駁』I,19,2.)。
- 17 この論文は、今世紀になって初めてドイツで出版された。19歳で書いた内容というのは全く信じられない感もあるが、彼のその後の著作内容から鑑みれば納得出来るものでもある。Harnack, Adolf v., *Marcion: Der Moderne Gläubige des 2. Jahrhunderts, Der Erste Reformator: Die Dorpater Preisschrift (1870)*. Friedemann Steck (hg.), Walter de Gruyter, Berlin, 2003.
- 18 これについては、ハルナック自身が第二版の冒頭で述べている。Harnack, [1924], S.V-VI.

- 19 cf. May, Gerhard, *Marcion ohne Harnack*, in: Marcion und Seine Kirchengeschichtliche Wirkung, Walter de Gruyter, Berlin, 2002, S.1-7.
- 20 こうした立場は、当時の例に漏れず、楽観的な歴史観と進歩主義的見解として、ハルナックと活発な議論を交わしたカール・バルトに代表される弁証法神学に批判されることになる。
- 21 ハルナックとルター派教会との関係についてはレントルフによって書かれた次の著作の冒頭を参照。Harnack, Adolf von, Das Wesen des Christentums. Trutz Rendtorff(hg.), Gütersloh, [1904], 1999, S.13.
- 22 当時のドイツ・ルター派とビスマルクとの関係に関しては、深井氏の著書を参照した。深井智朗『ハルナックとその時代』キリスト新聞社、2002年、29-36頁；同『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』教文館、2009年、176-229頁。
- 23 深井 2009、210-212頁。
- 24 トライチュケは1860年以後、ビスマルクの擁護者という立場にあった。cf. 木村靖二「トライチュケ」『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、1998年、1186頁
- 25 Weinzierl, Erika, *Art. Antisemitismus VII*, in: TRE, Band 3, Walter de Gruyter, Berlin/ New York, 1978, S.158-159.
- 26 深井 2009、202-204頁。
- 27 Harnack, 1999, S.215-219.
- 28 ここまでの「アンチ・セミティズム」と「アンチ・ユダイズム」の用語法の分析は、キンツィッヒの研究に従った。Kinzig, Wolfram, Harnack, Marcion und das Judentum: Nebst einer kommentierten Edition des Briefwechsels Adolf von Harnacks mit Houston Stewart Chamberlain. Leipzig, 2004, S.16-18.
- 29 「反ユダヤ主義」の概念規定に関しては、次の事典を参照した。徳永恂「反ユダヤ主義」『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、1998年、1306頁；同「ユダヤ人問題」『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、1998年、1625頁。Dan, Joseph, *Art. Antisemitismus / Antijudaismus*, in: RGG 4 te, Band 1, Mohr Siebeck, 1998, Tübingen, S.556-557; De Lange, Nicolas, R.M. und Thoma, Clemens, *Art. Antisemitismus I*, in: TRE, Band 3, Walter de Gruyter, Berlin/ New York, 1978, S.113-119.
- 30 この内容については旧約聖書（続編）の『マカバイ記』に書かれている。この反ユダヤ教政策に対する抵抗として、前163年にマカバイ戦争が勃発した。
- 31 cf. 黒川知文「アンチ・セミティズム」『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年、60頁。
- 32 この点が、同時代の公同教会側、例えば使徒教父文書の『バルナバの手紙』などとの相違であるとビーネルトは指摘している。Bienert, Wolfgang, *Markion-*

- Christentum als Antithese zum Judentum*, in: Christlicher Antijudaismus und jüdischer Antipaganismus. Herbert Frohnhofen (hg.), Hamburg 1990. S.142-143.
- 33 Goppelt, Leonhard, Christentum und Judentum: im ersten und zweiten Jahrhundert. Gütersloh, 1954, S.273.
- 34 『創世記』のアダムに関して、また、『出エジプト記』の律法や、『ヨシュア記』のエリコの攻略など。これらについてのマルキオンの解釈に関しては、テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』II.21.1などを参照。
- 35 プラトン『ティマイオス』29.A.
- 36 プラトン『ティマイオス』29.E-30.B.
- 37 Goppelt, 1954, S.273-274; Räisänen, Heikki, Marcion, in: A Companion to Second-Century Christian 'Heretics', Antti Marjanen (edd.), Leiden, 2005, S.116-117.
- 38 テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』III,6.
- 39 テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』IV.26; V.15.
- 40 エイレナイオス『異端反駁』I.27.3.
- 41 テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』III,6.
- 42 ただし、現代の宗教的寛容、例えばカール・ポパーやハンナ・アーレントなどの議論と単純に結び付けることは出来ない。マルキオンは唯一神教的立場を取らないキリスト教信仰を志向していたのであるから、元来寛容の立場に近似しやすいと言える。
- 43 Wilson, Stephen G., Related Strangers: Jews and Christians 70-170 C.E. Minneapolis, [1995], 2005, p.199.
- 44 Wilson, [1995], p.208.
- 45 ウィルソンは、グラントなどを参照しながら、この点について指摘している。Wilson, [1995], pp.218-219.